

OKADA-ROOM Vol.15

おもごしをうつす—岡田三郎助と洋画家たちの人物画—

会期 2019年11月23日（土・祝）～2020年2月24日（月・祝）

佐賀県立美術館は開館以来、明治から昭和初期にかけて活躍した佐賀県出身の日本近代洋画の巨匠、岡田三郎助（おかだ・さぶろうすけ、1869～1939）の画業と人物を顕彰してきました。今年、令和元年は岡田三郎助の生誕150年にあたります。

Vol.15では、「おもごしをうつす—岡田三郎助と洋画家たちの人物画—」と題し、人物を描いた作品に焦点を当てます。古来より“人”というテーマは、画家たちにとって大変重要なものでした。それは岡田をはじめとする近代の洋画家たちも同様で、数々の印象深い人物画を残しています。彼らの自画像からは、画家としての意気込みや自己の内面に対する深い思索が見いだせます。また、親しい人々やモデルを描いた作品からは、像主の人となりや息づかいまでも感じられるようです。さらに当時の名士たちをモデルに画家が腕を振るった肖像画からは、時代の一断面も垣間見えます。

今回の展示では、岡田三郎助と、同時代の洋画家たちの手による人物画を、下記のとおり選りすぐって紹介します。画家ごとの人物表現の違いにもぜひ御注目ください。

1 身近な人へのまなざし

| No. | 作品名・資料名 | 英訳 | 作者名 | 制作年 | 寸法（本紙・cm） | 材質 | 所蔵 |
|-----|---------|---------------|-------|------------|-----------|----------|----|
| 1 | 自画像 | Self-portrait | 岡田三郎助 | 1899（明治32） | 48.0×37.0 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |

1897（明治30）年から約4年、岡田は文部省留学生としてフランス・パリに赴き油彩画を学んだ。本作は留学中のパリで描かれたもので、日本にいる家族に贈り近況を知らせる目的もあったようである。わずかに笑みをたたえ、目を輝かせた風格のある肖像は、当時の前途洋々たる青年画家・岡田三郎助の姿そのものといえる。

本作は現存が確認できる、岡田の唯一の油彩による自画像であり、その意味でも貴重な作例である。

★期間限定公開 展示期間：2019年11月23日～12月23日

（その後、博物館「県博クロニクル展」で展示予定 [2020年1月1日～3月8日]

| | | | | | | | |
|---|--------------------------------|--|-------|-------------|-----------|----------|-------------|
| 2 | <small>なかの たつ</small> 中野多津像 | Portrait of Tatsu Nakano, Okada's Cousin | 岡田三郎助 | 1893（明治26）頃 | 85.0×54.8 | 油彩・カンヴァス | 個人蔵 （寄託） |
|---|--------------------------------|--|-------|-------------|-----------|----------|-------------|

長崎県・神奈川県の記事を務めた岡田の叔父、なかの たけあき中野健明の娘・多津を描いた作品。健明は洋画家を志していた若き岡田の良き相談相手であり、岡田と家族ぐるみでの付き合いがあったようである。当時の岡田は画塾で修行中であり、色彩も暗くまだ筆運びに生硬さは見られるものの、澄ました中にあどけなさの残る少女の表情を、縁者ならではの親しみをもって誠実に描き取っている。

| | | | | | | | |
|---|------|------------|-------|-----------|-----------|----------|----|
| 3 | ぬいとり | Embroidery | 岡田三郎助 | 1914(大正3) | 72.7×42.4 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |
|---|------|------------|-------|-----------|-----------|----------|----|

岡田は明治39（1906）年、劇作家小山内薫の妹、八千代と結婚し、渋谷に新居を構えた。本作はそのアトリエの応接室内で刺繍にいそしむ妻を描いた作品。室内のインテリアや八千代の面差しの綿密な描写もさることながら、とりわけ手先の表情が丁寧に描かれており、プライベートで親密な雰囲気のかなかに岡田の充実した画力が伺える名作である。岡田は本作を終生手元から離さず、彼の没後はアトリエを引き継いだ辻家が所有し、2019年に辻家から当館へ寄贈された。

| No. | 作品名・資料名 | 英訳 | 作者名 | 制作年 | 寸法（本紙・cm） | 材質 | 所蔵 |
|-----|---------|------------------------------|------|------------|-----------|----------|----|
| 4 | 小代為重像 | Portrait of Tameshige Syodai | 黒田清輝 | 1897（明治30） | 25.3×18.0 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |

右下に「明治三十年六月六日箱根湯本萬翠楼ニテ寫ス 黒田清輝」とある。像主の小代為重は、黒田と同年代の佐賀出身の洋画家で、岡田の先輩格の画家でもある。

黒田は1897（明治30）年、小代や久米桂一郎ら白馬会の仲間と箱根へ旅をしており、本作はこの旅の途上で描かれたものであろう。黒田は小代より5歳年下であるが、白馬会を創設した仲間同士、気心の知れた間柄だった。スケッチ的な作品だが、闊達なタッチでこの友人の風貌をとらえている。

黒田 清輝（くろだ・せいぎ、1866～1924）

「今まで脂（やに）っぽい暗い繪の中にあつた私は、黒田師に接して急に明るみに出たやうな氣がして來た。」（岡田三郎助「平凡なる私の修業時代」）

1889（明治27）年、岡田は黒田清輝を知り、彼や久米桂一郎を通じて外光表現を積極的に受け入れていく。

黒田は1884（明治17）年に法律を学ぶためフランスに渡るも、画家になることを決意。帰国後は白馬会や東京美術学校で主導的な役割を担いながら、外光表現やヨーロッパの伝統的な絵画観の導入に努めた。

| | | | | | | | |
|---|-----|---------------|----------------------------------|----|-----------|----------|----|
| 5 | 自画像 | Self Portrait | <small>みくりやじゅんいち</small> 御厨純一 | 不詳 | 65.0×80.0 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |
|---|-----|---------------|----------------------------------|----|-----------|----------|----|

御厨は生涯に複数の自画像を残しているが、特に1916（大正5）年から1921（大正10）年の間は頻繁に自らの顔を描いている。本作もおそらくそのころに描かれたものであろう。堅牢でアカデミックな人物表現を得意とした彼にとって、自らの姿は、腕を磨くための最も身近な主題であったに違いない。こちらを見据えるような強いまなざしが画家としての自信や矜持を感じさせる。

御厨 純一（みくりや・じゅんいち、1887-1948）

佐賀市高木町に生まれる。1906（明治39）年上京、白馬会第二研究所を経て東京美術学校で学ぶ。同校の卒業生と「四十年会」などの洋画の親睦団体を立ち上げる。1926（大正15）年、フランスに留学、ヨーロッパを周遊しながら現地の風景などを描いた。第二次大戦中は海軍従軍画家として戦争画を手掛けている。力強い線と量感豊かな描写に特色がある。

2 人のすがたの探求

| | | | | | | | |
|---|-----|----------------|-------|------------|------------|----------|----|
| 6 | 矢調べ | Testing Arrows | 岡田三郎助 | 1893（明治26） | 72.5×105.0 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |
|---|-----|----------------|-------|------------|------------|----------|----|

明治26（1893）年、堀江正章が主宰する画塾「大幸館」の卒業制作として描かれた作品。まだ旧来の暗い色遣いが画面を支配してはいるが、老人の腰あたりにはわずかにコバルトブルーが用いられており、のちに花開く優れた色彩感覚の片鱗を見ることができ。岡田は、初めて堀江のもとで本格的な色彩の表現を学び、これが後に黒田清輝らのもたらした新しい画風を理解するのに役立った、と後年回想している。（佐賀県重要文化財）

| | | | | | | | |
|---|----|-------------------|-------|------------|-----------|----------|----|
| 7 | 少年 | Portrait of a Boy | 岡田三郎助 | 1899（明治32） | 41.3×31.8 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |
|---|----|-------------------|-------|------------|-----------|----------|----|

《自画像》と同じフランス留学中に描かれた作品。留学中に岡田は外光のなかの明るい色彩表現を会得するが、この作品では暗めの陰影で、堅実な描写を試みている。紅味が差した頬が幼さを感じさせる一方、明るく澄んだ瞳はどこか大人びた雰囲気も感じさせ、成長の途上で揺れ動く少年のみずみずしさがよく現れている。子ども、特に男の子を描いた作品は、岡田ではとても珍しい。

| No. | 作品名・資料名 | 英訳 | 作者名 | 制作年 | 寸法（本紙・cm） | 材質 | 所蔵 |
|-----|---------|-------------------------|------|------------|------------|----------|----|
| 8 | 画家の妹 | Artist's Younger Sister | 北島浅一 | 1929(昭和 4) | 80.7×100.0 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |

布張りの椅子にゆったりと腰掛ける女性。本作のモデルの女性は、これまではタイトル通り北島の妹であると考えられてきたが、同い年で同郷の友である御厨純一の妹を描いた作品だとも言われる。北島はこの年、御厨と共に「第一美術協会」という美術団体を結成し、本作はその第一回展に出品された。

北島浅一（きたじま・あさいち、1887-1948）

小城市に生まれる。本名の「朝一」は、朝一番に生まれたことに由来する。白馬会第二研究所を経て東京美術学校へ入学。同校では御厨純一や萬鉄五郎が同期であった。大正 8（1919）年から 3 年間フランスに留学、アカデミー・コラロッシに学ぶ。1921（大正 10）年、《踊り場》がサロン・ドートンヌに入選。帰国後は帝展・文展を中心に活躍する。速い筆致で洒脱な作品を多く残した。

| | | | | | | | |
|---|-------------------|----------|-------|-------------|-----------|----------|----|
| 9 | あざみ薊 | Thistles | 岡田三郎助 | 1908(明治 41) | 60.7×45.5 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |
|---|-------------------|----------|-------|-------------|-----------|----------|----|

第 12 回白馬会展への出品作。和服の女性の背後にはアザミの葉やキキョウが配され、秋の一コマであることがうかがえる。背景、着物、帯ともに緑色で統一されているが、それぞれ異なる色調に描き分けられており、岡田の色に対する鋭敏な感覚を見て取ることができる。

メランコリックな表情を浮かべる本作のモデルが誰かは、残念ながら不明である。同じ女性をモデルにしたと考えられる作品は、他に《雑草》（東京国立博物館蔵）が知られる。

| | | | | | | | |
|----|------|--------------|-------|-------------|-----------|----------|----|
| 10 | 朝鮮婦人 | Korean Woman | 岡田三郎助 | 1922（大正 11） | 45.5×33.5 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |
|----|------|--------------|-------|-------------|-----------|----------|----|

岡田は大正 11（1922）年、第一回朝鮮美術展の審査員として日本統治下にあった朝鮮半島へ渡っている。恐らくはこの時、現地の女性をモデルに描いた作品であろう。固く結われた髷が初々しい印象を与え、ふっくらとした頬や唇の描写がなんとも愛らしい。背後に描かれた花は、現在の韓国の国花にも制定されているムクゲと考えられる。

| | | | | | | | |
|----|-----|------|-------|-------------|-----------|----------|----|
| 11 | 裸 婦 | Nude | 岡田三郎助 | 1935(昭和 10) | 99.8×65.5 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |
|----|-----|------|-------|-------------|-----------|----------|----|

1935（昭和 10）年の第二部会展に出品された作品で、岡田円熟期の傑作である。当時の新聞記事では「今までの帝展よりもつと力瘤を入れた作品」（報知新聞）などと評され、早くより名作の呼び声が高かったようだ。展覧会後は朝鮮の李王家が一時所蔵し、旧李王家美術館（現在の徳寿宮美術館、ソウル市）に飾られたが、1940（昭和 15）年の岡田の遺作展に出品されたのちは、一般に公開されることがなかった。

モデルの女性は、当時岡田のモデルを数多くつとめていた北村久子である。（佐賀県重要文化財）

| | | | | | | | |
|----|------------|----------------------|------|--------------|-----------|----------|---------|
| 12 | タンバリンを持つ少女 | Girl with Tambourine | 百武兼行 | 1881（明治 14）頃 | 65.0×54.5 | 油彩・カンヴァス | 個人蔵（寄託） |
|----|------------|----------------------|------|--------------|-----------|----------|---------|

外務書記官として、百武が3度目にヨーロッパを訪れた時期に描いたもの。物憂げに目を伏せ、タンバリンを持つ手元を見つめる少女はどこか謎めいた雰囲気をもとう。子どもの頃、岡田は東京・葵坂の鍋島邸内で百武の油彩画を目にし、その写実的な描写に大きな衝撃を受けた。幼い彼は百武を真似て、陰影を付けた絵を描くことを試みたという。

百武兼行（ひゃくたけ・かねゆき、1842～1884）

現在の佐賀市片田江に生まれる。1874（明治 7）年からの鍋島直大（第 11 代佐賀藩主）の英国留学に随行し、ロンドン、パリ、ローマで本格的に油彩画を学ぶ。いち早く西洋で油彩画を学んだパイオニアの一人。代表作の《臥裸婦》（石橋財団アーティゾン美術館蔵）は、日本人が油絵具で描いた裸婦の最も早い例である。

帰国後に農商務省に出仕するが、病を得て帰郷し、42 歳で没した。

3 時代を生きた人々

| No. | 作品名・資料名 | 英訳 | 作者名 | 制作年 | 寸法（本紙・cm） | 材質 | 所蔵 |
|-----|---------|---------------------|------|-------------|-----------|-------|----|
| 13 | アイヌの顔 | Portrait of an Ainu | 三根霞郷 | 1924（大正 13） | 32.8×24.0 | 油彩・厚紙 | 館蔵 |

1924（大正 13）年から翌年にかけて、三根は画家仲間と北海道にスケッチ旅行に赴いた。おそらくその時に、現地で出会った男性を描いたものであろう。三根の特徴であるうねるような荒々しいタッチや暗い背景が、画面全体に劇的な効果を与え、像主の彫りの深い輪郭や射るようなまなざしには、見る者を畏怖させるような迫力が感じられる。

三根霞郷（みね・かきょう、1883～1968）

佐賀県杵島郡橋村（現・武雄市）に生まれる。17 歳（1900 年）で洋画家を目指し上京、小山正太郎の主催する画塾「不同舎」へ入門（同門に青木繁、坂本繁二郎などがいる）。佐賀に帰郷後、フランス留学を志しシベリアに渡るも断念、2 年間ウラジオストクに滞在する。その後は京都に居を定め、公募展にも出品することなく清貧な暮らしの中の身近な風景を描いた。晩年は水墨画にも画境を求めた。

| | | | | | | | |
|----|-------|----------------------------|-------|------------|-----------|----------|----|
| 14 | 藤山雷太像 | Portrait of Raita Fujiyama | 岡田三郎助 | 1914（大正 3） | 92.6×72.0 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |
|----|-------|----------------------------|-------|------------|-----------|----------|----|

松浦郡（現・伊万里市）出身で、大日本製糖（現・大日本明治製糖）社長、貴族院議員などを歴任した実業家、藤山雷太（1863-1938）の肖像である。この絵が描かれたとき藤山は 51 歳、岡田は 45 歳。互いに、それぞれの道でキャリアを極めつつある時期であった。

画面全体は柔らかく温かい色調でまとめられているが、一方で固く握られたこぶしや上向きの目線に、像主の堂々とした風格も感じさせる。

| | | | | | | | |
|----|-------|----------------------------|-------|-------------|-----------|----------|----|
| 15 | 斎藤恒三像 | Portrait of Tsunezo Saitou | 岡田三郎助 | 1936(昭和 11) | 60.6×45.3 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |
|----|-------|----------------------------|-------|-------------|-----------|----------|----|

| | | | | | | | |
|----|-------|-------------------------|-------|-------------|-----------|----------|----|
| 16 | 斎藤はる像 | Portrait of Haru Saitou | 岡田三郎助 | 1936(昭和 11) | 60.5×45.6 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |
|----|-------|-------------------------|-------|-------------|-----------|----------|----|

斎藤恒三（1858～1937）は紡績技術者で、三重紡績株式会社を経て東洋紡績株式会社（現・東洋紡）の第三代社長を務めた人物。斎藤はるはその妻で、ともに岡田と親しく交友していたという。《斎藤恒三像》は本作の他に、規格・ポーズが酷似したもう一点が確認されており（東洋紡株式会社所蔵）、岡田が同じ肖像写真を参考にして描いたものと考えられる。

本作や《藤山雷太像》の他にも、岡田は新渡戸稲造、大隈綾子（大隈重信夫人）、寺内正毅（陸軍軍人、政治家）など、当時の名だたる名士たちに乞われ、肖像画を描いている。

| | | | | | | | |
|----|-------------------------------|--|-----|-------------|-----------|----------|---------|
| 17 | きのしよひでやす 木下秀康大尉像 | Portrait of Captain Kinoshita Hideyasu | 青木繁 | 1910(明治 43) | 73.3×50.2 | 油彩・カンヴァス | 個人蔵（寄託） |
|----|-------------------------------|--|-----|-------------|-----------|----------|---------|

九州へ戻った青木は、肖像画制作を請け負うことで生活費を得ていた。本作もそうした肖像画のうち的一点で、佐賀県小城市出身の陸軍大尉・木下秀康を描いたもの。ただし、木下大尉本人はこの時既に亡くなっており、夫人の依頼で写真をもとに制作されたようだ。《海の幸》のような青木らしい奔放な筆あととは影を潜めるが、筆運びの的確さや細部へのこだわりが青木の力量が垣間見える作品である。

青木繁（あおき・しげる、1882-1911）

久留米市に生まれる。洋画家の森三美に学び東京美術学校（現在の東京藝術大学）に入学。1904（明治 37）年、千葉の海岸で代表作《海の幸》（石橋財団アーティゾン美術館蔵）を描く。1907（明治 40）年、東京勸業博覧会に《わだつみのいるこの宮》（同館蔵）を出品するも、三等賞という不本意な結果に終わり失意のなか帰郷。天草や佐賀を放浪し、28 歳の若さで没した。古事記を愛読し、神話に想を得た浪漫的な作品を多く描いた。

| No. | 作品名・資料名 | 英訳 | 作者名 | 制作年 | 寸法(本紙・cm) | 材質 | 所蔵 |
|-----|---------|----------------------------|-------|-----------|-----------|----------|----|
| 18 | 婦人肖像 | Portrait of Raita Fujiyama | 岡田三郎助 | 1914(大正3) | 92.6×72.0 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |

モデルの少女は、実業家・村井吉兵衛の一人娘、久子。村井は日本で初めて紙巻き煙草を製造販売したことで知られる。村井の別荘(京都の長楽館)の壁画を制作したことが機縁になり、高木は村井の援助を受けて渡英、ヨーロッパ留学の夢を果たした。

白いドレスと毛皮の描き分けや指先の繊細な表現に、高木の技術の高さが見て取れる。彼の肖像画の技倆は高く評価され、のちに明治天皇の御像を揮毫するという栄誉を賜ることとなる。

高木背水(たかぎ・はいすい、1877～1943)

佐賀市松原に生まれる。本名誠一郎。11歳で単身上京。明治26(1893)年頃から岡田三郎助を知り、画塾大幸館に入り本格的に洋画家を志す。雅号「背水」は「画家として“背水の陣”で精進する」という決意を示す。明治天皇の肖像画を描いたことで知られる。大正年間には朝鮮にアトリエを構え、現地の美術の振興にも尽力した。

| No. | 作品名・資料名 | 英訳 | 作者名 | 材質等 | 所蔵 |
|-----|----------|---------------------|-------|------|----|
| 19 | 素描 婦人習作2 | Woman (study) | 岡田三郎助 | 鉛筆・紙 | 館蔵 |
| 20 | 素描 男の顔 | Face of Man (study) | 岡田三郎助 | 鉛筆・紙 | 館蔵 |

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内 1-15-23

TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail:hakubi@pref.saga.lg.jp Web. <http://saga-museum.jp/museum/>